



いぶりかんない どうやこ とうやこ そうべつちよう とうやこ こくりつこうえん してい こはん おんせん じよう 人気
胆振管内の洞爺湖町と壮瞥町にまたがる洞爺湖。国立公園に指定され、湖畔には温泉やキャンプ場がある人気
スポットです。湖の中央に浮かぶ大島（中島）では今、生息する推定60～80頭のエゾシカを駆除する環境省など
の事業が進んでいます。こども記者2人がシカと島の自然の関係を探りました。（森朱里、写真も）

シカ減らし洞爺湖の植物守る

こども記者見ぶん録

洞爺湖温泉からの遊覧船に乗り込んだのは、洞爺湖町・虹田小4年の新井悠真さんと、登別市・青葉小6年の橋爪亜梨沙さん。環境省洞爺湖管理官事務所の国立公園管理官、奥野真木保さん（26）が案内役です。

船が進み、島が近づくのと2人は「大きい」「きれい」と目をかがやかせました。約30分で到着。周囲約10キロ、広さ約4・7平方メートル。最高地点は標高455メートルです。



洞爺湖・大島の遊歩道を歩く新井悠真さん（右）と橋爪亜梨沙さん（中央）。奥野さんがシカに食べられず残っている植物を指さします

人が持ち込み増加 食害深刻



まず洞爺湖町立中島・湖の森博物館へ。洞爺湖は約11万年前の巨大噴火でできた地面のくぼみに水がたまったカルデラ湖で、大島は約4万5千年前の火山活動で誕生したと学んだ後、遊歩道を歩きました。

もともと大島にエゾシカはいませんでした。1950年代後半に観光用に持ち込まれたシカが増え、ピーク時の2000年代前半には約450頭になりました。

奥野さんが植物を指さし「これはフタリスズカ。こちらはイラクサ。とげなどがありシカは食べません。シカが好む植物は、ほとんどなくなりまし」と説明。橋爪さんは「シカは好きらしいが多いんですね」とおどろきます。

シカが樹皮や草木を食べ続けた結果、50年前に約460種あった植物は04年、約120種に減りました。

約1時間歩いて着いた「大平原」は、シカの侵入を防ぐ高さ約2メートルのフェンスに囲われた所だけに、

多様な植物を取りもどそうと環境省や洞爺湖、壮瞥町などが14年度から、わなや銃によるシカの駆除を開始。本年度はすでに11頭を駆除しました。「メス1頭のおなかには赤ちゃんがいて、産まれてくる子どもも増えずに済みまし」と奥野さん。それでも島には60～80頭のシカが残っているといいます。

残るシカの駆除は難しくなっています。「鬼ごっこで最後までにげ切るような、足が速く警戒心の強いシカばかりだからです」と奥野さん。道路わきで普段、シカを見かけるのとは違い、橋爪さんは「島を歩けばシカが見られると思うていた」と意外そうでした。

新井さんは「島の自然がもどるには何年かかるの」と質問。「とても長い時間がかかります。元通りになるかわかりません」との答えを聞き「シカは人が持ち込んだのでシカが悪いわけではないと思う」と話しました。橋爪さんも「シカが連れて来られなければ、もつといろいろな植物が見られたかもしれない」とふり返りました。

環境省などは29年度までにシカをゼロにする計画です。奥野さんは「シカががいなわけではなく、本来シカがいなかったこの島に、さまざまな植物が育つ自然を取りもどしたいのです」と思いを述べました。

広葉樹のミツバウツギやアオダマなどが大きく育っていました。草原のような周囲とはまるで違い、シカが植物に与える影響（食害）の大きさが分かります。

⑤遊覧船から大島をながめる、こども記者たち。島の起伏の激しい地形も、残ったシカをつかまえにくい理由だそうです
⑥大平原ではフェンスの内側だけ植物がしげっていました。「シカに食べられなければ、本来はこれだけの高さの木や植物が育ちます」と奥野さん（左）